Switch スウィッチ

take free

愛媛発＊あすにつなぐ女性10人のものがたり

Yano Hiromi
Yoshida Miyuki
Kumano Tomoko
Fujimoto Itsuko
Higashinada Maki
Kikugawa Azusa
Yamamoto Yuko
Yamauchi Michiko
Mori Misako
Boushi Chiaki

フリーの世界で貫く「わたし流」は自然体

フリーパーソナリティ　**やのひろみさん**

PROFILE

やの・ひろみ
1975年、松山市生まれ。
愛媛大学を卒業後、同市のイベント企画制作会社に就職。退社後の2001年、企画制作舞台音響照明会社㈲タグプロダクト設立。ディレクターとしても活躍している。ギャラクシー賞（放送批評懇談会主催）の他、12年度日本民間放送連盟賞　ラジオ生ワイド部門優秀賞など、受賞多数。義理の両親、夫と2児の6人暮らし。松山市在住。

Q&A

Q フリーの醍醐味は？

良くも悪くも、やったことがすべて自分に跳ね返ってくる。自分次第ということ。だからこそいただく仕事に対して、心から感謝します。

Q 働くママのイメージは？

働くお母さんはイキイキしていてほしい。輝いているママを子どもはしっかり見ています。働きたい瞬間は人それぞれ。「働きたい」と思ったときがベストチャンスだと思います。

テレビやラジオなどメディアでおなじみの、やのひろみさん。5歳と2歳のママでありながら、「100回成功しても101回目に失敗したら次はない」というフリーの世界に身を置き、活躍しています。

2010年には、その年で最も優れたパーソナリティに贈られる「ギャラクシー賞」ラジオ部門DJパーソナリティー賞を受賞。過去には久米宏氏ら一流の話し手がそろう賞に選ばれてもなお、「主婦だという感覚」と語るやのさん。どこまでも自然体の話し手は、代わりのいない存在として多くの人に親しまれています。

実は、ディレクター職がもともとの志望。ですが、イベント企画制作会社に就職して間もなく、企画中のラジオ番組に出演することに。生放送中、方言丸出しの話し手に戸惑うリスナーから、苦情が殺到。それでも、「アンチも反響のうち」という先輩の教えを励みに、平日夜2時間の枠を3年続けました。

2000年、「昼帯」のラジオ番組に抜擢され、翌年、27歳で「もっと自分が信じた道を貫きたい」と独立。志を同じくする仲間とともに、企画制作会社を立ち上げました。

「私の商品価値は正直さ」と言い切るやのさん。言論の矛先は、政治経済にも及びます。歯に衣着せぬ物言いが、ときに生意気のレッテルを貼られます。それでも、「アナウンス学校に行ったこともない。これでいくしかない」と、自分流を通してきました。

レギュラー4本を持ち、週末は各地のイベント司会に引っ張りだこ

持ち前の語りを支えるもう一つの要素は、現場主義。おいしいものや面白い場所を耳にしては、「とにかく足を運ぶ」。出会いや感動をブログにしたためるのは、話のネタになる備忘録代わり。これらが「引出し」になり、地方局では2人目のギャラクシー賞に輝いたのです。「おいしいもの、すごい人に出会い、感じたものを言葉にしているだけ。私がすごいわけではない」。冷静に語るそのまなざしに、プロという文字が宿ります。

そんなやのさんが、思わぬところで壁にぶつかります。2007年、1人目を出産し、1カ月後に復帰。空けた穴はわずか。感覚が戻らない焦りに、育児不安が加わります。母乳育児に努め、空き時間にテレビ局のトイレで搾乳。発達の遅れを心配し育児相談に駆け込んだこともありました。

「完璧にしなきゃ」と思い込んでいた初めての育児。でも、2人目ができて、完璧でなくていいと思い、気が楽になったといいます。「この時期を乗り越えたから、何があっても大丈夫と思える。今では多くのママが応援してくれてうれしい」と、目を細めます。

現在は、テレビのニュース番組でコメンテーターも担当。帰宅後は家族の協力を得ながら家事、育児をこなします。子どもの就寝後に、録画したニュースをチェックし、ブログを更新すると午前2時を回ることも。そんな日常を奮い立たせるのは、応援してくれるわが子の存在と、リスナーや視聴者の「元気をもらってる」という声が、あるから。「これからも一人でも多くの人に元気を届けられる存在でいたいです」

在宅医療のスペシャリスト
看護の道で自分を生かす

地域専門看護師　**吉田 美由紀さん**

PROFILE

よしだ・みゆき
1976年香川県生まれ。
愛媛大学卒業後、同大学附属病院勤務。2000年聖路加看護大学院へ進学。05年結婚を機にベテル在宅療養支援センターへ。非常勤として産休育休取得後、09年から常勤。愛媛県がん対策推進委員としても活動。座右の銘は「一期一会」。
夫と1男1女の4人家族。松山市在住。

Q&A

Q壁にぶつかったときの気持ちの立て直し方は？
ままならない状況の中で固執するとダメ。考え直して目標設定を変えていくことが大切。失敗しても、その都度リセットしています。

Qキャリア構築は働く上で必須？
本当はキャリアを積まなくても、子育てに向き合ってふたたび安心して職場に戻れる環境が理想。今後はそんな社会になってほしい。

耳慣れない言葉である専門看護師。「ベテル在宅療養支援センター」の所長として働いている吉田美由紀さんは、愛媛ではたった1人という地域専門看護師の資格の持ち主です。

看護師は女性が仕事を継続するには確かな資格。しかし離職率が高いのも現状。そんななか吉田さんは、在宅医療のスペシャリストとして相談業務や県のがん対策にも関与し、南予の過疎地域へのサポート体制を整えるモデル事業にも携わります。家庭と両立しながらも、専門職として「地域住民の健康のための施策づくり」に日々、奔走しています。

吉田さんは愛媛大学看護学科を卒業後、大学病院の外科に就職。病棟での勤務のなかで、アフターケアを必要としながらも退院する患者さんを目の当たりにし、在宅医療への関心が高まります。同じころ専門看護師の制度が施行。9つある専門分野のなかで

も「地域」は在宅看護に深く関係していました。資格取得のためには実務経験5年と大学院での修士課程を修めることが必要でしたが、「これがあれば看護師以上に、どこにいっても自分のやりたいことがやれる」と、迷わずチャレンジします。

在宅医療の電話相談では、「できるだけ柔らかい口調を心がけています」と吉田さんは話す

大学院入試で、「経験が浅いのでは？」と面接官に聞かれ、「在宅医療のアルバイトでもなんでもやって頑張ります」と食い下がります。そして見事、聖路加看護大学院に合格。宣言通り、学業の合間に在宅医療の現場でアルバイトを積み、卒業後も在宅ホスピス一筋で経験を重ねます。帰宅時間は連日深夜まで及ぶほど。専門看護師は医療現場の管理職として働く人材なので、経営的なことも職場で学びました。

結婚を機に松山へ。東京で積んできたキャリアから離れることに二の足を踏んでいましたが、恩師の仲介があり、ベテル在宅療養支援センターで非常勤として働けることになりました。

実務経験が5年を迎えたころ、妊娠。「子育てが始まると取得が難しい」と決断し、資格取得のための大量のレポート作成に取り組みます。面接も終え、出産1ヵ月前に念願の専門看護師に。産休・育休の間に感じた、現場を離れるという不安。その気持ちをリセットし、今できることを考えて、手に入れた資格です。さらに、「妊娠中なら時間はある」と発想を変え、必要な知識を得るためにコミュニケーションや人脈作りの本で勉強。出産後は子どもを連れて出身大学へ顔を出し、仕事上の関係を「細く長くつなげる」ことに尽力します。

2009年、2人目の育休が明けたタイミングで常勤になり、現職に。現場経験を生かし、県のモデル事業では南予の過疎地域の問題も担っています。「在宅医療をやらないと、家で孤独死する高齢者が増える。きちんと対応する責任がある」

在宅看護の道を貫き、キャリアをつなげてきた吉田さん。「患者さん一人ひとりにいいケアをしていきたい」と今後を語るその顔からは、使命感が伝わってきます。

卵を生かした商品づくりで笑顔があふれるお店に

「たまご専門店　熊福」店長　**熊野 智子さん**

PROFILE

くまの・ともこ
1969年香川県生まれ。短大卒業後、高松市内の商社に勤務。夫と出会い、2人で寿退社。95年、夫の実家、四国中央市妻鳥町の「熊野養鶏」に嫁ぐ。
「全国畜産縦断いきいきネットワーク」の理事、「めぐり愛・媛ネットワーク」の会長を務め、畜産に携わる女性たちの相互交流を通し、魅力ある畜産業の発展に力を注ぐ。夫・2女2男の6人家族。四国中央市在住。

Q&A

Q家庭と育児の両立の秘訣は?
人に頼れるときは頼って、無理せず、周りを巻き込んで、仕事も育児も楽しくする。巻き込まれるのが嫌な人は自然といなくなるけど、巻き込まれたい人もいる。例えば、おじいちゃんやおばあちゃん(笑)。

Q目標とする人
義父・義母。

四国中央市にある卵直売所兼食堂「熊福」店長の熊野智子さん。家族が営む養鶏場「熊野養鶏」で、採れたばかりの卵を使った卵かけご飯の店として、県内外で評判になっています。熊野さんは店舗での販売からインターネットや電話での注文、経理など事務全般を担当し、販売部門を一手に任されています。

店長としての仕事に加え、栄養士の資格を生かし、卵を使った加工品づくりを担当。「塩味玉子」や「燻製玉子」、プリンなどを商品化。その実績が認められ、2011年度農山漁村男女共同参画優良活動表彰で農林水産大臣賞を受賞。「みんなに助けられてここまでこれた」と笑顔で語ります。

熊野養鶏は1955年から続く鶏一筋の養鶏農家。嫁いだ熊野さんを両親や友人は心配しましたが、不安はありませんでした。当初、義父母や夫から養鶏の仕事はしなくていいと言われており、子育てと家事に専念。家族の食卓を支えるのが熊野さんの務めでした。「卵を使ったら、経済的に助かる」という主婦ならではの考えから、卵料理を考えるようになります。

一方、お客さんから卵を贈り物にしたいとの要望を耳にし、どのように販売するか、家族で考えます。熊野さんは自然と会話に加わり、懸命に働く家族の仕事を手伝いたいと思うようになっていきました。

卵かけご飯定食450円。箱に山盛りにされた、自慢の新鮮卵は食べ放題。燻製玉子、自家製納豆の無料サービスも嬉しい

生卵だけでなく加工品を加えることができればと、試作を開始。テレビで燻製玉子の作り方を見て、実際に作り食卓に並べました。卵のゆで加減やだしの漬け時間などの苦労を重ねた末、商品化に成功。燻製玉子「薫ちゃん」ができあがりました。

家族の中で次第に「直売所がほしい」という思いが募り、2007年に念願だった「熊福」が誕生。卵は生で食べてもらうのが一番と「卵かけご飯定食」を看板メニューに据えます。おいしいと卵を買ってくれたらと、食堂の手前に直売所を設けました。

店を任された当初は「ご飯を炊き、卵を置いておけばいい」と安易に考えていました。しかし炊飯から、米屋の指導が入り、米の状態で炊き方も変え、水もグラム単位で計測。味噌汁も何度も味見を重ねるなど予想以上の苦労が待っていました。

お店ができ、仕事も増え多忙になっていく熊野さん。ある日、義父が言いました。「智ちゃんは経営者になりよる。それではいかん。もうけに急がんでええ。お客さんの立場にならないかん。生活できればええんじゃ」。「そうか」と何かを見失ったことに気づかされた瞬間でした。

仕事は楽しんでお客さんのことを思って働こう、と考えを転換。そうすると楽しく、楽な気持ちになれました。「お客さんに喜んでもらえるように、次は何しようかと常に考えていられる。今はそれが楽しい」

新商品の開発を任されている熊野さん。「卵を使っていろんな商品を作りたい」。この仕事に携わるようになってから生まれた夢。熊野さんの挑戦は、今からが本番です。

心の「交流」をいしずえに ボランティアで国際貢献

CAS（Create Alternative Society）代表　**藤本 イツ子さん**

PROFILE

ふじもと・いつこ
1943年今治市生まれ。
65年結婚。2人の子育て中に「運転免許取得」「大学の夏期講座受講」「PTA」など精力的に活動。90年当時女性の最年長者として愛媛大学法学部へ進学。98年CASを設立。趣味はハーモニカ。
夫と長女の3人暮らし。2女の母。
松山市在住。

Q&A

Q今の自分を作ったきっかけは？
喫茶店で9年働いたこと。経済的自立を得て家族の中で意見を主張できるようになった。夫が私を見る目も変わり、大学進学への理解も得られました。

Q「後輩」へ伝えたいこと
やりたいことを自分で見つけに行くことが大切。自分自身が積んできた経験を活かせる場所がきっとあるはず。

愛媛に来ている留学生をサポートしながら、県民との交流活動を行うボランティア組織「CAS」。その代表を務めるのが藤本イツ子さんです。

子育てが一段落し、「もっとスキルを磨きたい」と46歳で大学へ入学。それを機に広がる活動のなかで「社会に役立ちたい」という思いが募り、この組織を作り上げました。

言葉が通じなくても心の交流を大事にしたい―。身振り手振りで留学生と交流をはかる藤本さんは「ここは自分をいかすことができる場所」と、今なお精力的に活動しています。

22歳で結婚し専業主婦として2人の子どもを育てていた藤本さん。14年がたったころ、新築した家のローン返済のため、自宅で喫茶店を始めました。店を経営していると、駐車場のトラブルなど、法律にかかわる問題に直面。「法律を学びたい」と思うようになります。

子どもが社会人になり経済的に落ち着いたことで、9年間続けた喫茶店をたたみました。念願だった法学部を受験、愛媛大学法学部の夜間コースに通うことになりました。講義を受けるたびに、過去に経験した問題と重なり「ビンビン響いてきた」と藤本さんは振り返ります。

卒業後は知人の紹介で女性学の学習会に入り、翌年には市の事業でヨーロッパ研修に参加。普段行く海外旅行では見えなかった、貧困や女性問題などさまざまな課題を目の当たりにしました。

藤本さんは、より良い活動を目指し留学生からも意見を求めます

その後、研修会のメンバーとともに「男女共生フォーラム」を企画、運営。会のなかで、「日本の女性は勉強熱心でお金もあるのに困っている人を助けない」「なぜ外国人という枠を作るのか」との指摘を受けました。同時に留学生への支援を要請され、「今まで自分が経験し積み上げてきたことを社会へいかしたい」と、運営スタッフと1998年、CASを設立したのです。

CASが取り組む主な活動に、各家庭の余剰品を再利用し、留学生の生活を支援する、というものがあります。余剰品の回収や倉庫の整理整頓に留学生はもちろん、地域の人も参加。また、メンバーと留学生が対等な立場で交流を深めることを大切に活動しています。

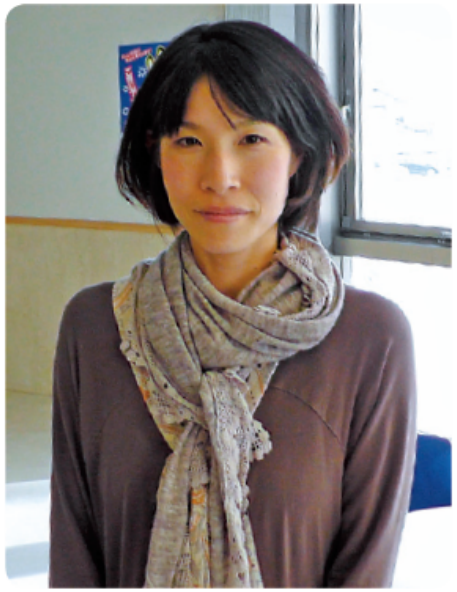
日本の文化を留学生に感じてもらったり、彼らの母国の文化を紹介するイベントを催したりと、国際理解へのきっかけも作ります。「英語ができなくても大丈夫。心を通わせることが大切なんです」。留学生は、藤本さんのそんな思いに触れ、一緒に活動すると自然と笑みがこぼれます。

代表として15年間走り続けてきた藤本さんですが、今後は新たなステージへの挑戦を考えています。組織を次につなぐための人材育成に努め、サポートする立場にならなければならないと思う一方、これまで多忙でできなかった外国人のホームステイもやってみたいという夢もあります。

「人生一度きり。いくつになっても遅いことはない。いつまでも勉強する心を持っていたい」。藤本さんの心はまだ、人生の通過点にあります。

支え合い、助け合う大切さを感じて 家族に温かい職場作り

株式会社パルソフトウェアサービス　総務部　**東灘 真希さん**



PROFILE

ひがしなだ・まき
1981年松山市生まれ。愛媛大学卒業後、㈱パルソフトウェアサービスに就職。
育児短時間勤務制度や産・育児休業制度を率先して利用することで実績を作り、みんなが利用しやすい環境になればと考えている。
職場では、入社3年目よりリーダー（課長）を任せられ、社の運営に積極的に関わる。夫、娘2人の4人家族。松山市在住。

Q&A

Q目標とする人は？
子だくさんの肝っ玉母さん（笑）。小さいことにこだわらない、大胆さが好き。

Q仕事と育児のバランスは？
仕事と育児を「両立する」と意気込むのではなく、経験を両方に取り入れ、双方がプラスになっていくもの。母親以外の人たちと関わることは子どもにとって大きなプラス。家事も子どもと分担することで、家族が関わる時間を増やし、一人で抱え込まないことを意識しています。

東灘さんは、社員約70人のＩＴ企業で人事や経理を担当しています。「社長の顔が見える風通しのよい会社で働きたい」と心に決め、この会社を選びました。世間では結婚、出産のタイミングで多くの女性が仕事を辞めていく中、二度の産・育児休業を取得、勤務時間を短縮し、会社の制度を利用しながら働き続けています。「一度職場を離れたからこそ見える部分もある。後輩にはぜひ仕事を続けてほしい」とエールを送ります。

なぜ中小企業を選んだのか―。その答えは学生時代、大手レストランでアルバイトした経験にあります。ファクス１枚で親会社から命令が届き、言われるがまま働く、自分は歯車の一部でしかないもどかしさを味わいました。「決定に至るまでの経緯を知り、納得してから仕事をしたい」と考えるようになります。

就職先を探していた大学３年生のとき、合同セミナーの会場で、「パルソフトウェアサービス」に出会います。当時従業員30人余り、若い人が多く風通しの良さを感じ、就職を決意します。

入社して４年目に結婚し、翌年妊娠。当初出産後は家庭に入るものと考えていましたが、同僚が子育てしながら働く姿を目の当たりにし、次第に仕事を続けようと考え始めます。「どうしてもダメだったら辞めよう」

毎日の朝清掃は全社員で取り組みます。社長（写真左）は、何でも相談できる身近な存在

１年間の産・育休中は、会社の日報を家のパソコンで確認。月に１回は、自分でレポートを出して、子どもの成長具合や自身の状況を報告し、職場と連絡を取っていました。

子どもが１歳になったのを機に仕事復帰。ソフトの入れ替わりも激しく、最新技術が次々に出てくるＩＴ業界。１年間のブランクは心配でしたが、復帰後も休職前と同じ部署に配属されたこともあり、準備不足でも経験から、乗り切ることができました。それよりも子どもの病気が続き、出勤できるのが週３、４日だったことが想定外でした。熱があるとすぐ保育園から電話が鳴る。看病の間に病気がうつり、自分もダウン。「こんなに休むのか！」。愕然としました。体力も落ち残業どころではありません。

「このままでは―」と、これまでの考え方を変えます。職場の人に協力を仰ぎ仕事を分担。お客さんに説明し時間や日程を調整し、限られた時間の中で段取りを変え、どうすれば仕事を続けられるか模索し始めます。

家族の協力も不可欠。保育園の送迎は家族に頼み、忙しい夕方の時間は夫が仕事を離れ帰宅し、子ども達をお風呂に入れ仕事に向かいます。

２回目の仕事復帰後は、総務の部署へ配属が決まり、新しい環境への挑戦となりましたが、働きやすい職場を作る立場に近づけたと前向きに受け止めています。また、社外へも目を向け働く女性の会合に参加するなど、交流の場を広げています。

入社10年目、現在は総務として会社の運営に携わることになった東灘さん。自身の経験を生かし、誰もが安心して働き続けることができる職場作りに向けて新しいスタートを切りました。「職場で働いている人だけでなく、その家族にとっても居心地が良い職場になれば。そう、願っています」

人の役に立つ商品を作ることが私の大きな幸せ

株式会社　さくらコットン　代表取締役　**菊川 あずささん**

PROFILE

きくがわ・あずさ
1974年北海道生まれ。
高校卒業後、アメリカへ語学留学。添乗員やワーキングホリデーでカナダに。出産後、デザイン文具メーカー・ミドリ勤務。2010年、今治ママ★コレ発足。12年株式会社さくらコットン設立。ヒエトリパットの開発事業で、えひめビジネスプランコンテスト最優秀賞受賞。夫と1男1女の4人家族。趣味は旅・読書。
今治市在住。

Q&A

Q病気を公表することに抵抗は？

ホルモンのバランスが安定していない女性も、少しの工夫で私のように回復することがあります。自分の経験を語ることで、元気になってもらえたらと思っています。

Qこれからの女性にメッセージを

自分が好きなことを忘れないで、大切に生きてほしいです。社会に役割があると、家庭で何かあっても自分の世界を守ることができると思います。

店頭に並んだカラフルな布。「さくらコットン」のスタッフが、企画から縫製、販売まで手がける「ヒエトリパット」。代表の菊川あずささんが女性の健康のために、改良を重ねて作り上げたオリジナル商品です。

北海道出身の菊川さんは２００４年、今治に移住。自身と同じ、市外から嫁いできた人たちと過ごす時間は、それだけで癒され、自営業の女性たちとも輪がどんどん広がりました。２０１０年、菊川さんは「今治ママ★コレ」を発足します。

やがて「家庭に入った女性にも、家庭以外の場所が必要では」と、菊川さんは考えるように。活躍している女性を紹介する冊子「ママ★コレ」を刊行。みなで成長しあえるよう、子育て講座や起業家セミナーも開催します。

菊川さんは10歳から子宮内膜症に悩まされてきました。「ママ★コレ」活動を展開していたころ、友人が作った布ナプキンを初めて使用し、その不思議な感覚に驚きます。今までさまざまな対処法を試したものの、改善されなかった日々。しかし、布ナプキンでは「びっくりするほど」体調が回復。「今治タオルで作ったら、もっと使い心地がいいのでは」。布ナプキンと地場産業が結びつきました。

手作業にこだわり1時間に2枚しか作れないヒエトリパット

直接肌に触れるものだから、オーガニックなどの生地にこだわりたい。商品名も、贈り物になるようなイメージに。１００人以上の女性からアンケートを取り、意見を収集しました。試行錯誤を繰り返すうちに、外出先の取り換えや、汚れがとれないという洗濯の問題が出ました。菊川さんは「まずは、何もない日に使用して、体を温めることを知ってほしい」と提案します。「毎日使いたくなるように、実用的なのはもちろん、デザインも大切」と、布選びにも力を入れました。

改良を重ねること1年半、２０１２年1月「布ナプキン型ライナー・ヒエトリパット」が商品化されました。

「さくらコットン」は、現在34名のスタッフで構成されています。募集をかけたことはなく、「ヒエトリパット」を気に入ってくれた全国各地の人がサポートしてくれています。縫製、販売、ホームページの管理まで、遠くは北海道在住のスタッフもいるそう。

設立には愛媛県の助成金も利用。地元の財団からは、価格設定やマーケティングの指導などを受けました。

「長年不妊に苦しんでいましたが、体調がよくなりました」と、お便りをもらうことも。菊川さんは、とても嬉しく、励まされたといいます。

こだわりの詰まった「ヒエトリパット」を手に取り、菊川さんは思いを語ります。「病気で働けなくなった時から、回復したら人のためにできることをしようと決めていました。私にとって、人の役に立つ商品を仲間と作っていくことが、大きな幸せです」

手を差しのべてもらった恩を忘れずに、「誰かのために」と考える菊川さんの周りには、人の輪が広がっていきます。

人が町に関わるチャンスを自転車を通して作っていきたい

NPO法人　シクロツーリズムしまなみ　代表理事　**山本 優子さん**

PROFILE

やまもと・ゆうこ
1973年今治市生まれ。
99年今治NPOサポートセンターに就職。
2008年しまなみスローサイクリング協議会設立。09年NPO法人シクロツーリズムしまなみ設立。中心市街地を自転車で盛り上げる「今治市中心市街地再生協議会サイクル部会」部会長。夫・長女・次女・義母の5人家族。趣味はヨガ。今治市在住。

Q&A

Q活動の原動力は？

元気な人に会う機会が多い。島民の仲間達からもパワーをもらっています。エネルギー切れになることはありません。家族をはじめ、理解者がいることはとても大きいですね。

Q女性の働き方について望むこと

成果を出して地位を確保してほしい。子どもの預け先がないなど、理想的じゃない環境を社会が支えるようなしくみを。そうじゃないと、働き続けることはとても難しいと思います。

１９９９年開通した西瀬戸自動車道、通称「しまなみ海道」。世界でも珍しい「海の上を自転車で渡れる橋」を、観光資源として生かそうとしているのが、ＮＰＯ法人「シクロツーリズムしまなみ」です。その代表理事を務める山本優子さんは、今治市街地と島しょ部の自転車観光ツアーの普及や、規則やマナーの啓発活動などのイベントを実施しています。

99年からＮＰＯを応援する組織「今治ＮＰＯサポートセンター」で、ボランティアコーディネーターとして働いていた山本さん。過疎と高齢化の進む島しょ部の地域活性化に携わっていました。「農業の担い手がいない」、「橋の交通費が高い」など島民の不安は尽きません。これからのことを島の人たちと話し合おうと、山本さんはセンターのスタッフとして住民座談会を行います。一番難しいとされる信頼関係を地道に築きながら「自分たちのふるさとをなんとかしたい」という島民の気持ちをどう形にするか、その方法を探りました。

山本さんにとって「活動の原点」となっているのは、２００１年に起こった芸予地震です。倒壊した家屋のがれきを片付けるなどの活動を、全国から駆け付けたボランティアと展開します。災害ボランティアセンターのコーディネーターとしての役割を通して、行政だけでは迅速に住民のニーズに応えられない現実を目の当たりにしました。そして「ほっとけん」という人の思いからはじまるボランティア活動が、「暮らしをよりよくする力になることを体感した」と振り返ります。「これからは自発的に動く市民の受け皿であるＮＰＯが、地域社会を支える存在になる」と感じました。

子ども向けイベントで、ペダルのない自転車「ランニングバイク」の乗り方を教える山本さん

シクロツーリズムしまなみを設立したのは、しまなみ海道開通10周年の２００９年。全世界のサイクリストが憧れる、しまなみ海道を有する町を「自転車のまち」として発信していこうとする活動に、自転車ブームは追い風になりました。しかしこのブーム、駐車場料金、排気ガス、満員電車、いずれも都会の交通事情から起こったものでした。地元今治では特に問題視されないことばかり。山本さんは「いずれブームは去るかもしれない。でも、自転車を生かした町づくりは、市民が支える息の長い活動になるはず」と冷静に判断しました。

「人の意識を変えるのはとても大事」と、山本さんは町づくりに成功した事例を参考にします。自転車に興味がなかった人に関心を持ってもらおうと、ヘルメットのデザインコンテストなどを開催しました。

自転車ツアーを組むのは、ふるさとを活性化させるための、ひとつの足がかり。「ツアーを行うことで外から人を呼び、交流したいという地元の人たちの意欲を生みます」と、山本さん。地域への愛着心は人が関わり続けるための一番のエネルギー。

「橋のたもとに住むものとして」という山本さんの言葉には、しまなみ海道を誇りに思い、愛するふるさとを守る覚悟が詰まっています。

キッチンカーで町おこし
浜の母ちゃん仲間とともに

遊子漁業協同組合女性部部長　**山内 満子さん**

PROFILE

やまうち・みちこ
1967年津島町（現宇和島市）生まれ。
20歳で結婚し遊子に嫁ぐ。宇和島市内で正社員勤務を経て、NPOの理事として2年間働く。2007年から現職。部長は山内さんで22代目。11年、愛媛大学の社会人講座を受け、活動に関する論文100ページを提出。趣味は家族写真のスクラップブッキング。「最近忙しくて途中で止まっています（笑）」。夫と義母らと暮らす。2男1女の母。宇和島市在住。

Q&A

Q座右の銘は？
「何とかなるさ」。だめなことがあっても、いい方向にいっているんだ、そのための苦難だと思うようにしています。だから、頼まれたことはできるだけ引き受けるよう心がけています。

Q何かしたいと思う人へのメッセージは？
自分の好きなことをやってみること。そして、仲間を作ってみることです。

岬の深緑色を映した湾を囲む、宇和島・遊子。無名の町を「全国区へ」と盛り立てる元気な母ちゃんたちがいます。漁業の妻たちが集う遊子漁協女性部のメンバー30人。その先頭に立つのが、山内満子さんです。

遊子特産といえば、養殖のタイやひじき。主婦の「もったいない」精神で規格外のものを使い、味噌をからめた「鯛さつま」、ひじきのカップケーキなど、20種類の加工品を作っています。2010年には、「中四国で初めて」という「キッチンカー」（左上写真）を制作。車内に備えた「台所」で調理し、各地のイベントに繰り出しています。

「子どもたちに食べさせるものを」という心配りから、加工品はすべて完全無添加。この母ちゃんの愛情がキッチンカーを、1日3会場掛け持ちの〝人気者〟へと仕立てていったのです。

女性部の部長に就いたのは、2007年。漁業が振るわず部の存続が危ぶまれた当時、若手ながらパソコンを扱え、なんでもこなす山内さんに白羽の矢が立ちました。

停滞していた活動をどうにかしたい―。1年以上悩み抜き、改革に乗り出します。地区別に選んでいた役員制を廃止。新たに作業別に4つの部を作り全員の希望を通しました。パート制も導入し、やる気を引き出す仕組みに変えていきます。

調理から販売までできるキッチンカーは、山内さんたちが寸法や配置などすべての仕様を考えた

既存の組織に大なたを振るった原動力。それは、これまでの雇用で自分の思いを貫けないもどかしさを味わってきたからだと、振り返ります。15年前、家業の養殖が、ハマチからタイに変わりました。タイが育つまでの3年ほど、家計に収入はありません。育ちざかりの3人の子どもを抱え、山内さんは片道40分かかる市街地で、正社員として働き始めました。

そんな日々に、不満が募ります。仕事だけで日常が終わっていく、自分が正しいと思い意見したことが会社にうまく伝わらない―。「どうせ働くなら地元で自分が思うように楽しくやりたい」と、5年勤めた会社をやめ、家業の発展を考えていたところ、女性部から声がかかりました。

「やるからには一番に！」が山内さんのモットー。その象徴が、キッチンカーづくりです。総工費は、1300万円。国と漁協の助けが不可欠。渋る漁協に、山内さんは、たんかを切りました。「これやらんかったら、遊子から子どもも嫁もおらんなる！」。人口減が続く地域を救いたいという願いは、1955年の女性部結成以来となる一大プロジェクトを突き動かしたのです。

イベントの朝は早く、仕込みは午前3時から。「ボランティアの気持ちがなければできない」と、山内さんは部員の努力に舌を巻きます。取り組みが実を結び、2012年度全国農林水産祭の内閣総理大臣賞を受賞。エントリー476団体のうち21団体だけが授かる名誉な賞に、メンバーの顔に責任感や誇りがにじんできた、と山内さんは感じています。「だれもここまでできるとは思わんかった。やりたいことを仲間と一緒に楽しくやっていれば、夢は実現するんです」

主婦から社長への転身
接遇のプロとして生きる

株式会社キャップ　代表取締役　**森 美佐子さん**

PROFILE

もり・みさこ
1963年松山市生まれ。
高校卒業後、市の関連施設で3年働いたのち、結婚退職。主婦の間も、テレビ局のモニター、幼稚園役員、地区の副会長など経験。1996年から6年間、キャップ（親会社は㈱「ダイキ」）で講師を務める。2004年に契約社員として現場復帰。05年に正社員、08年より現職。趣味は体力づくりを兼ねたランニング。1男1女の母。松山市在住。

Q&A

Q再就職は難しいのでは？
PTA役員でもなんでもやればきっと次につながる。壁は自分が作っているかもしれませんよ。

Q昇進を断る女性が多いと聞くが？
女性は「次につなぐ」ことにたけていて、社長（管理職）向き。引き受けてみて、できるできないは周囲が判断するものだと思う。

10年の主婦生活を経て社長に―。異色の経歴を持つ森美佐子さんは、接客のマナーの技術「接遇」を教えるプロフェッショナルです。社員教育事業を柱にすえる「キャップ」で、講師として勤めて通算16年。その駆け出しのころ、ある議員の応援演説を頼まれたことがあります。

支持者で埋め尽くす会場に響き渡った演説は当時、「あのときの方」と語り草になったほど。説得力―。講師として必要なこの能力を備える森さんに、周囲は「天職だ」と声をそろえます。

森さんは22歳で結婚し、「思い描いた通り」、専業主婦になりました。2人の子どもを育てる間も、地区やPTAの役員など積極的にボランティア活動を務めたといいます。その活動ぶりに目を留めていた知人が、森さんに仕事をすすめました。内容は、社員教育という未知の分野。「とにかく引き受けてみよう」と面接を受け、非正規雇用の「契約講師」として採用されました。

ひとたび家庭に入った女性が、就職するのは難しいといわれています。でも「主婦は何役もこなさなきゃならない。大変な奉仕活動をやってきたのでブランクを感じなかった」と、振り返ります。

研修では、受講生が納得しているか一人ひとりの表情まで気を配る森さん（写真左）

しかし、講師の仕事は、想像以上に厳しいものでした。春先は準備に追われ、布団で寝た記憶がないほど。家庭の事情と、自身の「やりきった感」から、6年勤めた会社を後にしました。ところがその後、長年連れ添った夫と離婚。住む家と仕事を探しているときに持ちかけられたのが、「社員を探している」という元同僚からの誘いでした。

一度は閉ざした道。断るつもりで会社に赴きました。ところが、森さんの復帰を望む会社側は、別の部署での勤務を約束。思い悩むうちに、つらさが自分を成長させたことを思い起こし、再びチャレンジすることにしたのです。

再就職して1カ月、事業が立ち消えになり講師の職に戻ることになった森さん。「ようやくこの仕事が自分の運命だと受け入れることができた」と、打ち明けます。

42歳で人生初の正社員になり、3年後にトップに就任しました。「社長と言っても、小さい会社なので何でもやらなきゃいけないんですよ」。社員11人を含め50人を束ねる今も、月半分は「現場」に立ちます。「実は人見知りで何度やっても慣れない。でも、やりきったあとの達成感は最高です。一生懸命やって社会に少しでも貢献できるのなら、もしかしたら天職なのかな？」

2012年秋、あるマナー研修の檀上に、森さんの姿がありました。「相手の心に響かなければあいさつしたとはいえません。マナーは相手あってのものです」。会社社長たちが「生徒」の会場に、力強い凛とした声が響き渡っていました。

人生の転機を周囲からいただいてきたという森さん。「出された階段は常に登る」との心意気を抱きながら、接遇の「伝道師」は、走り続けます。

楽しむことをモットーに
趣味の服作りで「ママ起業家」へ

Sa-Rah　オーナー　**帽子 千秋さん**

PROFILE

ぼうし・ちあき
1970年大洲市生まれ。短大卒業後、銀行員に。2001年に「Sa-Rah」のブランドを立ち上げ、09年実店舗オープン。「売って終わりにせず、人と人とがつながる心のやりとり」を目指し、各地で展示会や作家仲間との出張販売、セレクトショップへの委託販売等も行う。夫、1男1女の4人家族。大洲市在住。

Q&A

Q家庭と仕事の両立の秘訣は？

子どもたちが寝てから作業するなど時間のメリハリを作りました。家族を優先していたので、お洋服作りはできるときにできるだけ。ノルマも作らず、自分のペースで無理をしないこと。

Qママ起業家としてのアドバイスは？

家族の中の「妻・母」であると共にできる一歩が必ずある。成功か失敗かはやってみないと分からない。つらいことも次にいかせば失敗でなくなる。失敗も一つの経験と思ってあきらめず前向きに進んでほしい。

帽子家の自宅には、服作りのための3畳ほどのワークスペースがあります。その場所から、リビングで遊ぶ子どもたちの様子を見ながら帽子千秋さんは服を作ってきました。

わが子の服作りをきっかけに、フリーマーケットやネット販売を経て、2009年、地元大洲でショップを持ちました。「家族優先で無理せずやってきた」と話す帽子さん。子どもの成長に合わせて事業を発展させてきました。今では「ママ起業家」として、多くの雑誌で取り上げられています。「挑戦すれば必ず結果はついてくる」。そう信じて、楽しんで服作りを続けています。

地元で銀行員として勤め、24歳で結婚退職。2人の子どもを出産後、26歳からパートとして銀行へ復帰します。同じころ服作りも開始。たくさんの作品を作り、フリーマーケットで買ってくれる喜びに出会います。ホームページの作品紹介を通じ、「購入したい」という声が出たことで、当時あまり普及していなかったネット販売も始めました。

子どもの体も大きくなり、長女の中学進学を機に、婦人服作りへと切り替えます。ネット販売で全国から注文が入るようになったこともあり、各地で展示会を開くようになりました。

毎日洗濯をしても耐えられるよう、完成後は必ず一度洗濯をしてから並べている

「お洋服作りは趣味の延長。今のままで十分」と思っていた帽子さんですが、展示会でいつも購入してくれるお客さんを目の当たりにし、「お店を持つことが信頼につながるかも」と考えるように。日ごろから相談相手の子どもたちに話をすると、「いいと思う。向いてると思うよ」と一言。「気が付くと子どもたちが一番の理解者になっていたんですね」と、笑顔で帽子さんは振り返ります。

子どもの後押しで、12年勤めたパートを退職し、お店を持つ決断をしました。自宅から車で5分。幼いころから見てきた肱川のほとりに店舗の場所を決め、銀行からの借入金で費用を工面。約半年間を費やし2009年1月、帽子さん38歳の時に「Sa-Rah」のお店をオープンしました。

店舗を持ったことでネットのお客さんも全国から訪ねて来るようになり、出会いの幅がぐんと広がりました。「自分らしさを知ってもらいやすくなった」と帽子さん。見ただけでは分からない着心地を自ら感じてもらえるようになり、今では試着室から出てくるお客さんの姿を見るのが一番の幸せになりました。

Sa-Rahの服は、子ども服のころからリネンやコットン、ウールなどの天然素材で作り続けています。1点1点手作りにもかかわらず価格が抑えられているのは、生地を自ら仕入れ、ワンサイズで何枚も作るから。そんな帽子さんの服を愛するファンは20代から70代と幅広く、親子でお店に訪れるお客さんもいるといいます。

「お店もまだ始まったばかり。これからも、Sa-Rahのお洋服を着てくれる誰かのために、楽しんで作り続けていきたい」

Message

日本では、働く女性の6〜7割が第1子出産を機に退職する、という事実があります。専業主婦の86%が「働きたい」と思っている、というデータもあります。

女性が一歩踏み出せない一因として、具体的な行動や考え方の規範となる「ロールモデル」がいないということが挙げられています。

この事業では、現在専業主婦を中心に記者として参画していただき、冊子「switch」を作成しました。10名の女性だけではなく、記者スタッフの生き方にも注目してほしいと思っています。

リストアップ→取材→執筆→構成→冊子配布と交流会開催のプロセスをチーム力で進め、企業と協働で作業することには、今後の生き方や働き方のヒントがあります。

「働く」には、有償の仕事だけでなく、自己啓発やボランティア活動なども含まれます。多様な生き方・働き方を選べる時代。だからこそ、身近にいる人の生き方を広く社会に紹介し、自分の生き方へのヒントにしてもらう―。

そんなことを目指した、社会的な環境づくりプロジェクトです。

● 記者活動ブログ
http://ameblo.jp/7-switch/

仕事も生活も楽しもう。
“シゴト×生活”
‖
more happy!

Work Life Collabo.

特定非営利活動法人 ワークライフ・コラボ
〒790-0806 松山市緑町1丁目2-1和光会館1-C
http://www.worcolla.com/

Schedule

2012年7・8月
- 記者候補募集
- 記者面接、決定

9月
- メンバー顔合わせ
- 知識習得講義（3日間受講）
- チーム名「7switch」に決定
- ロールモデル候補の選定
- リストアップ、取材先の振り分け
- 7switchブログ開始

10月
- 取材スタート、編集作業
- 随時、打合せ、メールで情報共有

11月
- 編集作業
- 交流会の企画

12月
- 制作デザイン

2013年1月
- 冊子&チラシ納品、配布（下旬）
- PDFをHPへアップ（予定）

2月
- ロールモデルとの交流会（予定）

3月
- 成果や今後の目標を報告（予定）

switch on
～ただ今、編集作業中～

取材を総括して、何を伝えたかったか、もう一度整理。さらに冊子の完成後のイベントの準備も

初めてのメンバー顔合わせ。みな緊張の面持ちでのスタート！

取材でどんなことを聞くか、どんな人を取材するか、何度もミーティング

原稿書きはもちろん、カメラの撮影も大切な仕事

ERI HATANO 波多野恵理

「転んでもただでは起きない」。担当したやのさん、森さん、山内さんから異口同音に聞きました。苦境を跳ね返す力が3人の共通点。数々の金言を胸に、自分に今後、「七転び八起き」という座右の銘を刻むこととします。
（1978年生まれ。夫と2児の4人家族。松山市在住）

KOTO KIKUCHI 菊池古都

生みの苦しみ―。取材したものを「読み物」としてまとめることがどんなに大変なことか思い知らされました。もがき苦しみ多くの人に助けてもらって、でき上がったものはわが子のような存在。ありがとうございました。
（1974年生まれ。夫と2児の4人家族。松山市在住）

switch off
～編集を終えて～

MAKI MORI 森麻實

この経験で出会ったみなさんからは生き方を教わりました。苦しい場面ではたくさんの方たちに助けられ、「人」とのつながりが大切だと学び、もっと「人」が好きになりました。出会えたすべての人に感謝します。
（1985年生まれ。夫と1児の3人家族。松山市在住）

YUMI IWAMI 岩見由美

この貴重な経験で学んだことは、謙虚と感謝。担当した菊川さん、山本さんをはじめ、出会った方はみなこのキーワードをお持ちでした。そして笑顔が輝いています。冊子を読まれた方に、少しでも伝わりますように。
（1969年生まれ。夫と2児の4人家族。松山市在住）

NORIKO INOUE 井上紀子

どんなに忙しくとも、子どもが小さい、時間がないと言い訳することなく、何事にも前向きに取り組む姿勢を学ばせていただきました。時間は作るものなのですね。関わった全ての皆さんに感謝致します。
（1973年生まれ。夫と2児の4人家族。松山市在住）

この冊子は、
もう一度自分の生き方を見つめ
次のステップに登ろうとする女性のために作られました。
ご紹介する10人は、起業、ボランティア、会社員など
それぞれの「居場所」で輝いています。

Switch（スウィッチ）

タイトルを飾るこの言葉には、
冊子を読んで、誰かの心のスイッチを押す
きっかけになれば、との思いが込められています。
ライターは主婦5人。
わたしたちが一から作り上げたこの冊子が、
皆さまに無事届けられたことを心より感謝いたします。

2013年冬

発行元／愛媛県　（平成24年度愛媛未来づくり協働提案事業）
企画・問い合わせ先
／NPO法人ワークライフ・コラボ
／http://www.worcolla.com/
協働先／株式会社えひめリビング新聞社